

ケンペル・ツェンベリ―・シーボルト
その1 ケンペル

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

江戸時代西洋文化との交流の窓口は長崎出島であり、そのオランダ東インド会社の商館を通じて、植物学も含む西洋科学技術・文化が入ってきた。その中で、顕著な活動を通じて著名なのは、ケンペル (Engelbert Kaempfer)、ツェンベリ― (Carl Peter Thunberg)、シーボルト (Filipp Franz von Siebold) である。当然日本側はこれらの人々をオランダ人として遇するわけであるが、この三人はオランダ人ではなかった。ケンペル、シーボルトはドイツ人、ツェンベリ―はスウェーデン人である。そこで、こんなエピソードがある。シーボルトに接した長崎のオランダ通詞は、今度来たオランダ人のオランダ語はおかしいと言い出したのである。これに対して、シーボルトの返事は「自分は山オランダ人である」というものであった。言語学上、ドイツ語は高地ドイツ語であり、オランダ語は低地ドイツ語であるので、これを逆手にとった返答であるが、けだし、当意即妙の答えというべきであろう。実際、ドイツ語を解する筆者は、あるときオランダライデンのバールヘーフェ博物館で以前あったレーベンフック (Antonie van Leeuwenhoek) 展のパンフレットがあったので入手したが、それは全文オランダ語で書かれていた。ところが、蘭独辞書を頼りに読むとほぼ理解することができたが、大きな違いがあったのは、Be 動詞や Have 動詞だけであったからである。今回は、この三人を何回かに分けて紹介しようと思うのであるが、初回はこの中では最も早く来日したケンペルを扱いたい。

ケンペル

ケンペル (1651 年～1716 年) が日本へ来たのは 1690 年から 1692 年の 2 年間であり、徳川 5 代将軍綱吉の治世の元禄時代であった。彼は二度の江戸参府旅行に加わり、綱吉に会い、その前で求められて歌を唄い、踊りを披露している。そのケンペルは、多くの日本に生育している植物情報も西洋にもたらした。彼が帰国後、1712 年にドイツ レムゴーで出版したラテン語で書かれた *Amoenitatum Exoticarum* (直訳は「異国の不思議」であるが、伝統的に「廻国奇観」という訳がある) (図-1) の第 5 冊では日本の植物が図入りで紹介されて

いる。そこには、コブシ (*Magnolia kobus*) やイチョウ (*Ginkgo biloba*) など学名の中に取り込まれているものもあり、その数は数え方によるが 300 を超える。その出典が京都で活動した朱子学者中村^{てきさい}てきさい 翁の 1666 年に刊行された絵入り百科事典である「^{きんもつ}訓蒙図彙」であるが、それ以外のソースもあることは、北村四郎博士の考証にあるとおりである (北村 1953)。リンネ (Carl von Linné) 以前であるので、学名に直接反映されているものは少ないが、主要なものはそこに載っており、クスノキ、カジノキ、ダイズ、カキ、キリなどである。リンネがケンペルの描いた図をタイプ標本相当として、新種植物として採用していることは、リンネとしては異例である。その他、アダンソン (J. Adanson) やツェンベリ―も新種として幾つか採用している。

一方、没後 15 年後に最初英訳として出された「日本誌」 (History of Japan) は、広範囲にわたる日本紹介の文献として西欧では第一級の文献として長期にわたり高く評価され、東プロイセン ケーニヒスベルクで地理学も講じていた哲学者カント (Immanuel Kant) は何かにつき辛めであるが、この書を彼の地理学において重用している。また、幕末に黒船で開国を強いたペリー (M.C. Perry) 提督もこの書を携えてきた。なお、ドイツ語版は事情があって、ずっと遅れて没後 65 年後に出版された。その片鱗は、2006 年に訪問したオックスフォード大学で伺うことができた。偶々フック (Robert Hooke) の「ミクログラフィア」で調べたいことがあって、友人のリーバー (Chris Leaver) 教授を訪問すると、筆者の嗜好を知っている彼は、植物標本室のバンウコン (*Kaempferia galanga* L.) の標本を見せてくださったのである。まさに、これはケンペルにちなんで設けられた属の標本であり、「廻国奇観」にも採録されている。由来を調べると、ケンペルの没後、ケンペルの遺品は甥によって、ほとんどすべてイギリスのスローン卿 (Sir Hans Sloan) に売却されたのであり、これにより大英博物館が発足したという経緯が明らかになった。多分その時、一部の資料はオックスフォードへもたらされたのであろうということであった (長田 2014)。次には、筆者が調査したイチョウの学名を通して、彼が材料

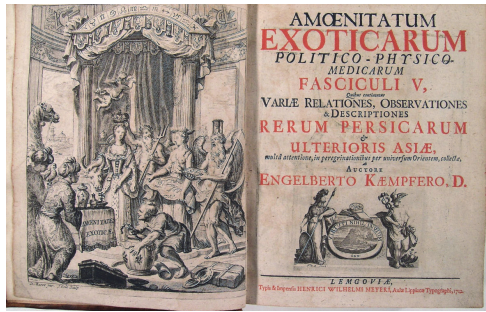


図-1 「廻国奇観」の見開きページ ネットより

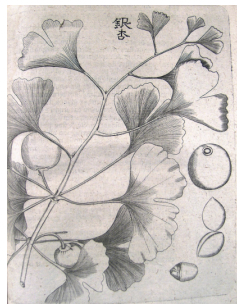


図-2 「廻国奇観」イチョウ図 文献2より



図-3 「訓蒙図彙」イチョウ図 文献3より

表-1 「廻国奇観」の植物表記 文献2より

アルファベット	表記例
I	イモ(芋)は, Imo, U(ウ)
J	ヤマタチバナ(山橘)は, Sankitz, 俗には Jamma Tadsjbanna キョウ(杏)は, Kjoo, Karmomu キョウ(薑)は, Kjoo, Ssjonga, Fasi Kami
G	イチゴ(莓)は, Itzingo, Foo, Mou
Y	ビワ(枇杷)は, Bywa, ネズミモチ(鼠桂)は, Nysimi motsj
その他	ハナ(花)は, Fana, ヒョウ(瓢)は, FeO モモ(桃)は, Too, 俗に Momu, ナシ(梨)は, Ri, Nas と表記

とした植物をどう扱ったかが見えてくることを紹介する。

イチョウ

イチョウ (*Ginkgo biloba* L.) は、リンネによって「廻国奇観」の図をタイプ相当として学名がつけられ、属名はその名前によっている (図-2)。以前より、なぜ *Ginkgo* という異例なスペリングが採用されたかについては説があり、国内外の事典類を見られるとすぐわかるように、ケンペルが銀杏の音読みである *Ginkyo* を聞き違えてそのようになったのでであろうとされている。筆者は、「イチョウの自然誌と文化史」(長田 2014) を出した時点でこの説に納得できなかった。また、一部には北ドイツでは、g も j も i に近い音であるので、必ずしも聞き違えてはならないであろうという説もあるが、それも説得力はないと判断した。なお、ドイツ語には y はまれにしか登場しない。このため、「廻国奇観」に登場するすべての植物名を書きだして、日本名との対比を行った。その結果、ケンペルは、I, J, G, Y をすべて使い分けており、微妙な発音の使い分けを区別しているのである (表-1)。例えば、アンズ杏には *Kjo* の音を当てて、銀杏の *Ginkgo* とは区別している。このようなことから、むしろケンペルは語の発音に忠実にスペリングを採用していると判断できた (Nagata *et al.* 2015)。*Ginkgo* に似たものとしては、イチゴを *Ichingo* と書いており、イチンゴであり、長崎弁を反映していると推定された。長崎は今日 *Nagasaki* と発音するが、ある時期 *Nangasaki* と発音されており、その時期はイチョウを *Ginkgo* と発音した時期と重なっていることも浮かび上がってきた。実際、当時発表されたスウィフト (J. Swift) の「ガリバー旅行記」では *Nangasaki* となっている。これから判断されることは、-kgo は咽頭に抜ける音を反映しており、「訓蒙図

彙」読んだ人がおり、その人は長崎弁で発音していたのでであろうと推定した (図-3)。すなわち、*Ginkgo* に近い音であろう。それでは、その人は誰かということになるが、長崎弁を喋る若手であり、何か事情があってその名前を明らかにできなかったのであろうとした。これについては、別な探索からファン・デア・フェルデ (P. Van der Velde) 博士は大英博物館のケンペル文書の中から雇用の控えの文書を見出し、そこから、今村源右衛門を探り当てた (ボダルト-ベイリー 1994)。ケンペルの「日本誌」には、若手の通詞で日、華、蘭語をよく理解する人が手伝ったとあり、その有能な通詞から彼の必要とする情報はほとんどすべて入手できたと述べているが、その具体的な名前は全くない。この点に関して、名前を秘匿する必要があったのは、通詞全体を統括する立場の出島乙名である吉川儀部衛門は、病気の治療をケンペルに依頼していたので、彼の帰国後も治療を可能にするため、通詞団ぐるみで内緒にしたのでであろうと推定された。また、それは鎖国されてから日が浅く、表に出れば必ず死罪となる時期であったので、今日に至るまでの300年間その名前が明らかにされなかったのでであろうとも推定された。図らなくてもイチョウの学名追跡から、300年前のケンペルの活動が明らかになってきた。なお、これに関して若干付け加えれば、上記に「鎖国」といい、我々は日常的に使っているが、幕府が公式にそう宣言したことはない。これは、江戸後期の蘭学者志筑忠雄が「廻国奇観」の一部に日本が世界から切り離されている状況をケンペルが記述した箇所があり、そのオランダ語訳を「鎖国」と訳して以来、江戸時代は鎖国であったという考えが広まっていた。かように、ケンペルは話題に事欠かない人であるが、より詳しくという方は文献 (Nagata *et al.* 2015) を参照されたい。

文献

- 北村四郎 1953. 科学史研究 26, 19-24.
 長田敏行 2014. イチョウの自然誌と文化史, 裳華房.
 Nagata, T. *et al.* 2015. Taxon 64, 131-135.
 ボダルト-ベイリー, A. 1994. 「ケンペルと徳川綱吉」, 中直一訳, 中公新書.